幼なじみのお仕置

ぽいふぃ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
幼なじみのお仕置

【Ｎコード】
Ｎ０４７１ＨＷ

【作者名】
ぽいふぃ

【あらすじ】
本当にあった痛い話

誤字あったら報告お願いします。

（前書き）

初投稿で何すればいいか分からない

小学生の時、当時仲の良かった女子の幼なじみ、瑠衣（るい）といつも通り家で遊ぶ約束をしていた。

瑠衣は男女分け隔てなく接することが出来る人気者で、可愛いと言うよりかっこいいと言う言葉が似合うボーイッシュな短髪で活発な女の子だった。

学校が終わって直ぐに家に行く、と中から「いやぁぁ」「もういやぁぁ」と瑠衣の泣き叫ぶ声が聞こえてきた。何度か喧嘩して泣かせてしまった事はあったが、許しを乞う悲鳴のような泣き声は初めて聞いたので、最初は瑠衣に何かあったのかと思い、挨拶もせずに家の中に駆け込んだ。

中に入るとより鮮明な瑠衣の泣き声にパシィンと柔らかいものを連続で叩く様な音も聞こえてきた。

少し怖くなった自分は玄関から瑠衣の部屋まで忍び足で移動した。

瑠衣の部屋の前まで行くと少し部屋のドアが開いていたのでそこから中の様子を覗くことが出来た。

すると中には上半身を机に押さえ付けられ、下半身を剥き出しにされた瑠衣の姿があった。スカートとパンツは膝下まで下げられており、おしりはもちろん。初めて見る女児の縦筋までしっかり見えてしまっていた。その時自分は女の子のお股ってこんな感じになってるんだ〜など感心してしまっていたが、おしりに目をやるとそれどころでは無かった。

瑠衣のおしりは目も当てられないほど真っ赤に変色しており、とても痛々しく、少し触っただけでも破裂しそうな程腫れ上がっていた。

すると

パシィン

と瑠衣の事を押さえ付けていた母親らしき人が真っ赤に腫れたおしりを平手で激しく打った。その瞬間

「ぎゃぁぁぁ」

瑠衣の叫び声が響き渡った。僕はその光景を目の当たりをして声を出しそうになったが直感的に今叫んではいけないと思い、両手で口

を塞ぎ声を押し殺した。
パシィン　パシィン
間髪入れずに母親はおしりを叩き続けていた。その間瑠衣は何度も「痛いっ」「もうやめて」「ごめんなさい」と繰り返し泣き叫んでいた。
その光景はまさに地獄だった。瑠衣の真っ赤なおしりに平手打ちが入る度に、自分が叩かれてる訳でもないのに自分のおしりを手でおおってしまうほど痛々しかった。しかし瑠衣は両手を大人の力で押さえ付けられているため、どれだけ暴れてもびくともせず、おしりを手で守る事ができないまま、腫れ上がったおしりに衝撃が加わり激痛が走る。それを泣きながら訴えることしか出来なかった。
しかし無慈悲にも瑠衣の母親がお尻叩きを辞めるわけは無く、淡々と無言でおしりを叩き続けていた。
何分その光景を見続けただろうか、気付けば自分はその光景に見入ってしまっていた。何故かその時自分の股間が熱くなるのを感じた。
そして３０回ほど打たれた頃母親の叩く手が止まり初めて口を開いた。
「なんで嘘吐いたの」
母親は瑠衣に対して質問した。しかし瑠衣はすすり泣きながら、ひっくひっくとしゃくりあげており、まともに言葉を発することが出来ておらず、少し間を開けて「ごめんなさい」と小さく呟いた。
「謝ってなんて言ってないの、なんで成績表は無いなんて嘘を吐いたのか聞いてるんだけど」
責めるように母親が瑠衣に問い詰めるが瑠衣はまた「ごめんなさい」と呟くだけだった。
「そっか」
そう言うとさっきまで下ろした手をもう一度振り上げた。
それを察知したのか瑠衣は必死に叫び始めた
「ごめんなさい！成績が悪かったから怒られると思って嘘吐きましたごめんなさい！」

すると上げてた手を下ろした。
「そうなんだぁじゃあ嘘も吐くし成績も悪いし陽はとっても悪い子なんだね。」
そう言うと下に置いていてたランドセルから飛び出た３０ｃｍの竹の物差しを引っ張り出し
「悪い子にはもっとキツいお仕置しないとね」
今度はその物差しを振り上げた。
瑠衣は何度も「ごめんなさい」「もうしませんから」と必死に許し乞うがそんな事はお構い無しに、無情にも物差しは瑠衣のおしり目掛けて振り下ろされた。
ヒュッパン
「っ！？」
さっきまでとは全く違う、細いものが空気を切り裂いた後に小さく破裂するような音がした。
音こそ小さいが、威力は半端じゃないのは見てるだけでもわかった。
瑠衣はあまりの痛みに顔をのけぞらせ悲鳴を上げることもできていなかった。
「先生から聞いたけど授業中もずっとふざけてたんだってね」
ヒュッパン
瑠衣に先生から聞いていた事を言いながら物差しを振り下ろす。
「隣の子とずっとお話したり、宿題もしなければ、勉強してる様子も無い」
ヒュッパン　ヒュッパン　ヒュッパン
「ぎゃぁぁぁいだいいだいいだいいだいぃぃぃ」
そう言いながら何度も物差しを振り下ろした。さっきよりもペースが上がっており、心做しか力も入れているようにも見えた。
瑠衣はさっきまでとは全く違う獣が鳴く様な悲鳴を上げ、可愛いと評判だった顔は苦痛に歪み、涙と鼻水を垂らしてぐしゃぐしゃになっていた。
「そんな子に育って欲しくないから今から叩き直すね」

そう言うと一旦手を止め
「今から１００回コレで叩くから」
そう言って再度物差しを振り上げた。
瑠衣は一気に青ざめ本気で抵抗しようと唯一動かせる首を必死に振り「やめて！」「賢くなる！いい子になるからもうやめて！」
しかし母親がその懇願を聞き入れることは無かった。
ヒュッッパン
「ぎゃぁぁぁぁ」
瑠衣のおしりに赤黒いミミズ張れが増えていく。

そうして１０分程経った頃、瑠衣のおしりは元の丸く綺麗な白桃のような原型を失い、一回り程腫れ上がり、紫色のミミズバレの跡で所々血が滴っているようにも見えるほどボロボロになっていた。
「今日はこれくらいにしてあげる」
そう言って押さえ付けていた腕を離し、物差しを床に落とした。
瑠衣はぐったりとしていた、５分ほど経った頃からほとんど動かなくなっており、声も上げず叩かれる度に少し体が跳ね上がるだけになっていた。自由にされても壊れた玩具の様に動く様子が無かった。
しばらくすると
ぷしゃあぁぁぁと音がして瑠衣の縦筋からチョロチョロ小水が滴っているのが見えた。
どうやら安堵からおもらしをしてしまったようだ。
「うわ汚い」
軽蔑の声を母親が上げた。
「おもらしする情けない穴は塞がないとね」
そう言ってポケットからタバコとライターを取り出し火をつけた。
それに反応して瑠衣が動き出し、さっきまでの体制を崩そうとしたが、それよりも早く母親が身動きを取れないよう押さえ付け、火がついたタバコを瑠衣の縦筋に近づけた。
「それだけはやめて！これから勉強もするし、お喋りもしない！賢

くなる！おもらしもしないから、それだけはやめてください！お願いします！」
さっきまで朽ち果てた人形のようにぐったりしていた瑠衣は暴れだし懇願し始める。
「何回それ聞いたと思う？もういいから」
呆れた声で吐き捨て持っているタバコをゆっくりと近づけていく。
まるで見せつけ恐怖を与えるようにゆっくりと。
「お願いします！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさっ」
そしてタバコを瑠衣の小さな尿道に押し当てた。
ジュゥゥウ
焼けた石に水をかける様な音がした。さっきまで尿だった水分が蒸発し煙を上げる。それがタバコの温度の高さを表していた。
「いぎゃぁぁぁ」
瞬間、鼓膜を突き刺す様な叫び声が響き、思わず耳を塞いでしまった。
それと同時に母親も驚いて手を離してしまい持っていたタバコを床に落としてしまった。床は瑠衣の小水で水溜まりが出来ており、火が燃え広がることは無かった。
次の瞬間バタンと瑠衣が縦筋を手で多い床に倒れてしまった。
その場に倒れ込んでしまった事により、瑠衣は小水まみれになっていた。
それをゴミを見るかのような目で母親が見ていた。
その光景を見てこれ以上ここにいてはいけないと思い忍び足でその場から逃げ出してしまった。

次の日、瑠衣はいつも通り登校してきた。その日はいつもの笑顔は無く誰とも話さず。椅子に座る時も一瞬ためらい、座った後は苦痛の表情を浮かべ声を押し殺す様に唇を噛んでいた。
そして1度もトイレに行くことが無かった。

他のクラスメイトは不思議がっていたが自分だけは何があったか知
っていた。
知っていて眺め
その光景を
楽しんでいた。

（後書き）

分からな言ったら分からない